
白花の笛

薄桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白花の笛

【Nコード】

N8563S

【作者名】

薄桜

【あらすじ】

今日は何て良い日だろう。

だが、青い空、美しい花々、軽快な鳥のさえずり・・・美しいもの目にし、耳にしても、俺の心は一向に晴れない。

こんな日は自由に気ままに・・・そう、あの鳥達のように好きなようにしていたかった。

・・・なのに。

せつかくの宴の誘いを断って、供を一人連れただけで馬に揺られる

こと一日。

どうしてあんな場所に行かねばならないのか・・・

序（前書き）

平安中期の華やかな時代を舞台にしたお話です。

序

何処からか、読経の声が聞こえてくる。

幾重にも重なる麗しい声が、荘厳で美しい旋律を紡ぎ出している。

さぞ名のある方のお屋敷で、護摩行ごまぎょうが行われているのでしょうか？

この漏れ聞こえる声を耳にするだけで、有り難く勿体無いもったいなと思われる。

美しい錦の袈裟を身に纏う僧達が、くゆる香の中で経を唱える様はさぞ見事なものであろう。

数珠のじやらじやらと鳴る音に、ぱちぱちと火がはぜる音までが、拍子をとるかのように加わり。

この光景を実際に見る事ができれば、それだけで功德となりましよう。

それにしても、本当に見事。

なんと美しい響きでしょう……。

……はて、何故こんなに近くで聞こえるのでしょうか？
わたくしは何処にいるのかしら？

そういえば、今宵は琵琶びわの音が聞こえませんか。

弘敦様ひろあつは？

……今宵、あの方は何方いすかたに在られるのでしょうか？

序（後書き）

とりあえず、これ出だし（これじゃなくて次）が4月ですので、4月に始めたいなと思ってたのですが・・・全然間に合っていないけど、流しちゃえ

だってほら、ギリギリ4月スタート。

普段は、完成したものを順次投稿ですが、

今回は、チビチビ書いて投稿のスタイルでいってみようと思います。

・・・途中で投げないように頑張ります。

以下追記（2011.06.11）

チビチビ書いて投稿のスタイルってのは、性に合わない事が分かりました（^^；

・・・と、いう事で、章単位で書き上げて、上げていきます。

あとがきに用語解説を付けておりますが、分からない言葉などがありましたら、その都度ご質問下さい。

出来る限り答えます。

壱・笛の音

青く抜けるような空の下。日の光は暖かく、心地良い風もさやさやと頬を撫でる。

道の脇に見える木には、幼い芽が顔を覗かせ厳しい冬からの解脱を喜んでいるようだ。

あちらこちらに咲く可憐な野の花は、春の訪れを祝福してその花弁はなびらを揺らしている。

そして、耳を擦くすくする自由な鳥達のさえずり……。

今日は何て良い日だろう。

だが、そんな美しいもの目にしても、俺の心は一向に晴れない。

こんな日は自由に気ままに……そう、あの鳥達のように好きなようにしていたかった。

6

今の時期は愛でる花が山ほどあって、宴に事欠く事は無い。

だから、それぞれのお屋敷が、他家に負けるものかと贅を尽くして競い合う。

庭に植えた見事な桜を、見珍しく貴重な品を、そして趣向を凝らした艶やかな宴を。

……楽しいだろうな。

そこに参じて自慢の笛や琵琶を鳴らし、女どもを沸かせるも良し。

その場の噂で、良い女の話を仕入れる事もできただろう。

名手の舞を眺めるもよし、公達きんたちと蹴鞠けまりでもいい。

いやいや、行隆ゆきたかを誘って、弓の稽古でも楽しかっただろう。

……なのに。

せつかくの宴の誘いを断つて、乳兄弟の達実だけを伴い馬に揺られること1日。

どうしてあんな場所に行かねばならないのか・・・
出家して木槿と名乗る尼になったはずの伯母上に、何故こんな贅沢な品ばかりを届けに行かなければならないのか？

2年前に夫を亡くし、先達せんだつに習い出家したまでは良かったが、髪が尼そぎになった以外は何も変わらなかつた。
いや、もつと質たちが悪くなつた。

都から多少離れただけの風情のある場所に庵・・・とは名ばかりの屋敷を建てさせ、そこから文一枚であらゆるものを呼び寄せる。

強気な姉に昔から頭の上からない父は、伯母上から文が届くたびに、「怒らせるな。」

と毎度、念を押すように言うだけ言つて、自分は一切関わろうとしない。

まったく、あれが天下の左大臣だつてんだから世も末だ。

姉の言いなりの男が政を仕切つてていいのか？

主上おかみに申し訳ないと思わないか？

この国は大丈夫なのか？

既すでに上の兄弟二人は結構な役を頂いており・・・結局一番下の、まだそこそこの俺にその御鉢が回つてくるという訳だ。

今回届けられた文には、新たに単ひしえを仕立てるための絹や綾。冊子や巻子の物語をありつたけ。無ければ暇な女房に写させて必ず持つてくるように・・・って、何様だ？

後は新しい硯箱を1つ・・・との事だつたが、これが世を儂んだやつつの欲しがる物か？

しかし、やたらと目の肥えたうるさい伯母上の事だ。下手に粗末な品を用意して、

「これがやんごとなきお方の用意するものですか？」

と冷やややかな口調で、直接文句を言われるのは俺だ。
乳母の石路と、その娘の山百合に頼んで、それ相応の品を手配して
もらった。

硯箱などは見事過ぎる時絵で、これなら文句も出まいという一品だ
った。

・・・くそつ俗物め。

ちなみに伯母上は、以前から仲の良かった友人、白蓮を誘い一緒に
住まっている。

白蓮も似たような時期に夫を亡くし尼になった経緯の女で、そちら
はまだ尼らしく簡素に質素に努めている。

親を亡くしたまだ幼い薄幸の姪である朝霧を引き取り、日々経を讀
んで暮らしている・・・正しいあり方なのだろうが、こちらも俺の
性には合わない。

この世の一切の楽しみを振り切って、気の進まぬ場所に向かわねば
ならないこの仕打ち。道すがらの景色や風情を楽しんでも、割に合
わない。

もう幾度とも知れぬ溜息を吐き・・・始めはその都度、気を紛らわ
せようと話を振ってきた達実も、それを無視するようになって久し
い。

あと少し。そう、あともう少しばかり先に行けば伯母上の庵に辿り
着く・・・そんな時だった。

一瞬それは風の音かとも思った。

いやいやそんなわけがない、これは笛の音だ。

しかも荒削りながら、なかなかの色を奏でている。

「達実、ここで待ってる。」

「弘敦様、如何なさいました？」

達実たつみの声を聞きながら馬から下りて、適当な木に手綱を結ぶと耳を澄ました。

「聞こえないか？」

鳥の声や風にそよぐ木々の音とは明らかに違う、意思のある高く細い音。

「笛の音ですね？」

「これを奏でている者を知りたい。」

俺はそれだけ言うと、脇の茂みに迷いもせずに分け入った。後ろからは俺の名を呼ぶ情けない声が聞こえはするが、そんな瑣末さまつな事には一切構わず。ただ笛の音の方へと意識を向けて、耳を澄ます。

そうして音のもとへ・・・その笛を鳴らす者のもとへと、俺は何度も方向を探りながら夢中で歩を進めて行った。

杏・笛の音（後書き）

弘敦は相当にやんごとないお方であります。

・・・そしてその分、我が俣です。

三男という立場から、芸事に身を入れて、結構な名手として名を馳せております。

これはそんな主人公のお話。

時代的な考え方とか考慮して書いていく気ですので、もし差別的な表現出てきても勘弁してくださいね。（予防線）

（用語解説）

・公達 きんたち

貴族の子弟ですね、いいところのお坊ちゃまです。

・蹴鞠 けまり

きつとご存知、昔の遊びです。鹿皮製の鞠を一定の高さで蹴り続け、その回数を競う競技だそうです。

・乳兄弟 ちちきょうだい

高貴な方々は、子供に自ら乳はやりません。近く子を産んだ女を乳母めのととして雇います。乳兄弟はその乳母の子供で、育てる雇い主の子供と兄弟のように一緒に育ちます。

・尼そぎ

出家した女の髪型です。この頃は剃りません。肩や背中位までで切り揃えます。

しかしこの時代、女の出家は正式には認められておらず、自己申告のなんちゃって尼僧だったりします。

・左大臣

朝廷の最高機関、太政官の職務を統べる、まあ政治のトップです。常にいた訳ではないらしいのですが。こういう役職の右と左は、左が上の位です。

せつかくなので(?)偉い人に見えました。

・主上おかみ

天皇の事です。

・単ひとえ

ここでは裏地のついていない、夏用の着物を指します。でも、下着も単つていいいます。

・絹や綾

反物です。

・冊子や卷子かんす

冊子は綴じられた本です。巻子は巻物です。

・硯箱

習字道具を入れる箱ではあるのですが、どうもそれだけを入れた訳では無いようです。高価な装飾が施されていて、何かを色々入れて渡す便利アイテムだったらいいです。おまけに「硯の蓋」と言えば今で言うお盆の意味で、お菓子とか入れて主人に出したそうです。

式・白い花の向こう

踏み込んだ茂みは高い木の間に埋めるように、低木がひしめく場所だった。

未だ枯れ色の中に、それでも枝という枝から少しだけ顔を出した芽に邪魔をされ・・・いちいち衣を引つ掛けながらも、必死にそこを抜けると、後は枝打ちされ下生えも少ない、よく手入れされた山を進む事が出来た。

乾いた落ち葉を踏みしめて進み、時折その音を避け立ち止まり、耳を澄ます。

衣擦れの音さえ立てないように、ただ耳に神経を集中させて、風に揺れる葉のざわめきの中から、笛の音だけを探した。

それを何度か繰り返すうち、もう耳を澄まさずとも笛の音が聞こえてくるようになった。細く高く震える音。あれは篠笛しのぶえのものだろう。このあたりに住まう卑しいものの中にも雅を解する者がいるのだなと、ますますその奏者に興味が湧いた。

篠笛は、貴族の使う笛『龍笛りゅうてい』から派生した、装飾など一切無い竹そのままといった庶民の笛だ。

龍笛より高い音を出し、祭りや仕事の合間の謡いに使われるらしい。俺はそんな祭りなんかに参加した事などないので人伝ひとつたに聞いた程度だが、こんな演奏を耳に出来るのなら、忍んで加わってみるのも一興かもしれない。

それにしてもなかなかのものだ。まったくどのような者がこれを奏でているものか、早く近付いて是非その姿を見てみたい。

楽しくもない伯母上の所に行く用より、こちらの方がよっぽど良い。

音に惹かれてしばらく行くと、大きく開けた場所に出た。何やら小さな建物のようなものがあり、その前には簡素な鳥居。何かの神・・・おそらく土地の神を奉ったものだろう。

その粗末な社殿の脇に、真っ白い雪柳の花が垣のように低く広く植わっていた。

風に散らされた花びらが地を覆う様は、名の通り季節外れの雪のようで・・・とても美しい光景だった。

その白い地面を踏み散らしながら進むと、雪柳の向こうに粗末な身なりの女童めのわらわが一人立っていた。

そう、それが俺の探していた者だった。

その女童めのわらわは目を閉じ、一心に篠笛を吹き鳴らしていた。衣から伸びる手足は細く、足には泥が散っている。

しかし、そのしなるような手足には、若木のような伸びやかな生命力を感じさせた。

無造作な振り分け髪は、その身なりの割りに艶やかで、笛を鳴らすたびに揺れて光を返した。

・・・惹き込まれた。

たかが10になるやならずやの、卑しい女童めのわらわにだ。

その笛の音。笛を鳴らす指の動き。吹くたびにしなる体。

音に己おのれを乗せるように閉じられた目蓋には、切なそうな影が刻まれていた。

一歩足が前に出た。

遠くから姿を見るだけでは物足りない、もっと近くで、もっと近くで、その音を聴きたい……。

そしてもう一步。

俺は左大臣の息子だ。

なのに……何故、こんなにも下賤めづらひの女童むすめを切望しているのか？

分からない。

……分からない。

だが、俺は近付こうとした。

……どうして？

聞きたい。

……いや、『欲しい』そう強く思った。

女ながらに笛を吹く、類稀なる卑しい者をだ。

側に置いて、その音を聞きたい。

好きな時に、俺の琵琶と合わせたい。

神から授かったかのような、その音をいつまでも愛でていたい。

熱に浮かされようにふらふらと、目で捕らえた女童むすめのもとへ歩を進め、

……そして何かを踏んだ。

おそらくは何かの枝だろう。

しかしそれは、以外にも大きな音を立てた。

その音を耳にした女童は、動きを止めて辺りを見回して、俺で目を留めた。

無論、俺も女童を見ている。

驚きの表情はみるみるうちに翳りを帯び、やがて、

「あつ……」

と、細い澄んだ声を上げた次の瞬間。

脱兎の如く逃げ出した。

「待てっ！」

と、かけた声は無駄で、その姿は既に茂みに紛れて跡形も無い。

もつとその音を聴きたかった。もつと奏でる童女を見ていたかった。

……いや、俺は何をしようとしていたんだ？

女童を捕らえて、連れ帰る？

……自らの手で？

自嘲の笑みが浮かんだ。

今をときめく貴公子が、何たるざまだ？

俺は大きく溜息を吐いて、姿勢を正した。

いずれにせよ、喪失感は否めない。

何処の誰だか判らぬ下賤の者に、再び遇える訳もない。

先程の浅ましい自分を思うと、無理に探す気にもなれない。

……それでもやはり、諦めきれず。

何か手がかりは無いものかと、女童の居た場所を見回してみた。

しかし辺りには、これといった物は無く。
踏まれた草の上に、小さな足跡が残っているくらいのもだった・
・。

俺は、腹立ち紛れに一度地を蹴り、未練を断ち切るように背を向けた。

そして、一度通った道無き道へと足を踏み出した。

俺の本来の目的である、伯母上のもとへと向かうために、
残してきた達実^{たつみ}の待つ場所に向かって……。

式・白い花の向こう（後書き）

<補足>

笛は男の楽器だったんだそうです。

貴族と平民の間では、天と地ほどの差があり、人として扱われません。

五位以上の天上人と、それ以下の位の間にも、大きな差があるわけですから、

当然だったんでしょうね。

誘拐やレイプは、女が一人にいる方が悪いという認識だそうです。

なので、「もし襲われたら騒がずに従い、過ぎるのを待て」と教えていたそうです。

下手に暴れて、殺される事がないようにと。

やー、怖いですね（^^）；

（用語解説）

・龍笛りゅうふえ

当時は貴族が使ってた、高価な横笛です。

ちなみに笛は男の楽器で、そのラインを踏み越える者は普通いないようです。琴が女の楽器・・・だよな？

・卑しい女童めづかしいわらわ

そこら辺の庶民の女の子です。王朝文学、貴族でなければみんな「卑しい者」扱いです。

・人攫い

ざらにあつたようです。ちなみに「辻攫い」だと強姦の意味らしいです。京の都の辻で、一人で歩く女を捕まえる・・・と。逆にそれが出会いの場でナンパって意味もあるらしいです。

参・待ち人

行きとは逆に、歩くに易い山を過ぎると、当然のように最初に飛び込んだ茂みに難儀した。

乾いた枝はいちいち衣に引つ掛かり、おまけに顔や手にも時折掠め、肌^{かす}に記されたいくつかの赤い線は、少々痒いが下手に触ると化膿する・・・と頭で分かっているので、余計に腹が立つ。

そして、正しい場所に戻れているのかどうかも実は怪しい。

勢いで飛び出して、笛の主の姿を見る事は叶ったが、見事に逃げられてしまった事を思えば、今これだけの苦勞をしている事に見合う内容だったかと、頭の中で秤^{はかり}にかけて、まあとんかなと納得し怒りを収めた。

方向さえ合っていれば、道の何処かには出て・・・後は何とかなるだろう。

とりあえずそう考える事にして、その後は女童^{めわいわ}の事に頭を廻らせた。

あんなに細くて貧相だというのに、見とれてしまったのは何故か？
やはりあの見事な笛か？　そして美しく散る白い花か・・・
しかし惜しい、何故に女か。

まったく、男であればあれほどの笛、誰かが後ろ盾に付けば・・・
何なら俺でも良い、

そうすれば良い楽師として、名を馳せる事も出来ただろうに。

しかし、そうやって考え事をしながら茂みを分けて進んだのが悪かった。

取りこぼした枝がしなり、己の横っ面めがけて思いつきり弾いてきた。

馬の軽い嘶いななきが聞こえ、茂みの向こうにきよるきよるしながら座っている達実たつみの背中が見えた。これは相当に運が良いようだ。しかし、音を立てて茂みを抜け切ると達実たつみにいきなり怒鳴られた。

「弘敦様ひろあつ！ 勝手に何処かに行かないで下さい！！」
しかし、そう言った後は顔を背けて笑いを堪えている。

・・・まったく、不敬な従者だ。

「勝手じゃない。笛の音を奏でている者を知りたいと言い置いて行っただろう？」

不機嫌ぼしに返事をしながら、衣きぬについた枯れ葉や埃を払い、歪んだ烏帽子も直した。

しかしながら、細かについた掠り傷や、ほんのり熱を帯びた左の頬は如何ともしがたく思っていると、達実たつみは不意に立ち上がり。

「すぐそこに小川があります。まずは冷やして頂きましょうか。」
と、手ぬぐいを渡してきた。

わざわざ場所を説明をされずとも、道に沿って流れている小川に向かい、傷のついた手を手を浸けると冷やりとして心地良い。そしてそのまま手と顔を洗い、手ぬぐいで拭ぬぐった。

それから改めて手ぬぐいを水に浸し軽く絞って左の頬に当てると、熱や痒みが幾分和らいだような気がした。

「ご無事で何よりですが、一方的に言い捨てて行かれただけです。太刀も佩はかずにふらふらとして・・・何かあったらどうする気ですか？ 私は私で馬をそのままにしておく訳にもいかず、ずっと苛々して待つていたんですよ？」

達実たつみの元に戻ると、すぐさま説教が始まった。

頬を冷やしつつ馬を見やれば、腹帯を緩められて暢気そうに草を食はみ、時折耳をひくひくと動かしていた。

「まあ、馬には良い休憩になったろう？」

「もちろんその小川で水も飲ませました。弘敦様ひろあつの頬を冷やすた

めだけの小川ではございませんからね。」

「……しつこいな。」

「でも、もう少し行けば槿木様の庵ですよ。こんな半端な場所で休ませずとも、今頃はしつかりと休んでいた頃でしょう。弘敦様が茂みなんか飛び込んで行かれなかった場合の事ですけどね。ご理解頂けますでしょうか？」

「棘があるな……。」

「当然です。とても高価な物を積んでるのですから……野盗がいつ出たっておかしくないんですよ？」

もし野盗が側にいて、今の話を聞いて襲ってきたとしたら。その場合達実が呼び寄せた事になるだろう。

だがしかし一理ある。……いずれにせよ、長居は無用という事か。達実には一切返事をせず、濡れた手ぬぐいを馬の鞍の上に置き、もう少し我慢してくれよ？ と、青星・青鹿毛で額と右前足に白い斑のある馬なので、そう名付けられたの首を撫でて辛い、腹帯を締め直した。

「わざわざ野党を呼ぶような真似をするな。」

木に結われた手綱を解きながら釘を刺し、馬上の人になると後ろも見ずに馬を歩ませた。

「ああっ、弘敦様！ 待つてください。」

「騒ぐな、馬が怯える。」

馬が大きな音を嫌う事を、知らぬ訳でもあるまいに……どうも達実は詰めが甘く、落ち着きが無い。

何事か愚痴を言っていた達実は、「さあ、行け。」と、馬に蹴りを食らわして、馬は抗議の嘶きを上げてから前に進みはじめた。

……馬に当たるとは、まったく達実は酷い奴だな。

参・待ち人（後書き）

（用語解説）

・烏帽子えぼし

平安時代の男被ってる帽子みたいなやつですね。これは人前で必ず被るもので、被ってないのは裸でいるような感覚だそうです。結った髪に紐で結び付けて固定するらしいです。現代の神楽の楽用の烏帽子は、被るだけだったのにな。

・野盗

これもいつぱいいたいですね、強盗、追いはぎとか普通に。何せ治安は良くないですから。ちなみに、強姦して女の着物まで奪うと酷い奴で、そのままと良い人だそうです。意味不明ですよ？

・青鹿毛あおかげの馬

毛の色での分け方です。きっと私より競馬好きの方の方が詳しい。昔お世話になった「ブルースター」って馬をモデルにしてみました。馬肉寸前に1万円で引き取られた乗馬用の馬です。額に白い班があります、それを星と言うそうです。

えーと、現在の馬装なら結構良く知ってるんですけど、昔のはよく解らないです。

一応資料は見たんですけど、拍車って明治時代に西洋から入った物らしいので、馬走らせる時は蹴らないのかな・・・膝で締めて走らせるように調教されたのかな？

あのあぶみ鐙でどうやって蹴るんだ？

・・・と、私は混乱しております。

肆・思いがけぬ期待

「八重の桜は儂さが足りないと思わないか？」

いかにも派手好みの伯母上らしい趣味だ。

整えられた庭園のあちこちに八重のぼてつとした薄紅色の低い木が植わっている。

「俺は山桜の方が好きだ。特に大木の桜は見事で、濃い目の色なら尚良しだ。」

伯母上の屋敷着き、馬は厩うまじの者に任せ、荷はこの女房に引き渡した。

俺は伯母上の許に案内されて簗すのこ子を歩き、庭に植えられた里桜に目を向けながら愚痴をこぼした。

しかし、

「私は八重も一重もどちらも好きですよ。」

前を行く年増の女房は、そう笑う。

「桜を見れば、春もたけなわの気がしますわね。梅も終わり、次の色に目を楽しませる事が出来れば・・・私はどちらでも構いません。」

「花は時とともに移ろい、いずれ散る。その花卉はなびが舞う様子も美しいだろう？　だが、八重だと派手過ぎて情緒に欠ける。それに大き過ぎて、椿のようにそのまま花ごと落ちてしまいそうな気がする。」

「それは花の事ですか？　それとも女の事ですか？」

再び女房は笑った。袖で口元を隠しているが、それ故ににやにやとした目が目立つ。少々下卑げひた笑いだ。

「・・・花だ。」

「そうですね。」

伯母上と変わらぬ年頃の女房は、相変わらず口元を隠したまま、くすくすと声を立てずに笑う。どうして年の入った女はこういう話が

好きなのか・・・

俺はもうこれ以上、この女房と口を開く気になれなかった。

この様子では、もう何を言っても男と女の話に持って行かれてしま
いそうだ。

話をしながら赤味を帯びた左の頬を、ちらちら見てくるのも気に入ら
ない。

意味ありげにこちらを窺う女房を完全に無視し、時折庭の花に目を
向けながら、無言で伯母上の許に向かった。

「弘敦殿ひろとくありがとうございますとございます。皆それぞれ立派な品で嬉しゅう
ございます。」

ふわりと漂う香りの中で、御簾の向こうの伯母上は立て板に水とば
かりにつらつらと礼を述べた。

当たり前だ、本当に良い物ばかりを運んできたんだ。

「それは何よりです。遙々とほとほこちらまで出向いた甲斐がありました。」

「いえいえ、心にも無い事言う必要はありませんよ。」

くそっ、御簾の向こうの人物はいつも一言多く・・・はつきり言っ
て苛つく。

「ところでその頬はどうされました？ どこぞの女と痴話喧嘩でも
？」

この笑う声も気に障る。

「・・・違います。茂みの枝が弾きました。」

「妙な所に入り込んだものですね、何かありましたか？」

「・・・別に、伯母上に申し上げるような事ではございません。お
気になさらないで下さい。そんな事より伯母上、この度届けた絹な
ら、さぞかし立派な衣きぬになるでしょうね。」

御簾から覗く伯母上の小袿こびきも見事だ。悔しいが薄桜萌黄かひなの襲の色目
もいい。

「そうね、仕事の速い人に任せておいたから、私も着せるのが楽し

みだわ。」

そう言つて、ころころと笑う声が響く。この人には嫌味も通じないのか？

「・・・つて、着せる？」

「ええ、ある人に贈ろうと思ひましてね。まさか、私のを仕立てると思ひましたか？」

「それはまあ、そう思つのが普通でしょう？・・・では、朝霧にでも？」

そろそろ成人、装着・・・いや、ここで盛大な事をやるとは思へないので、鬢削ぎか？

勝手にそう考えていたが、それはあっさりと否定された。

「いいえ、最近面白い子を見つけましてね。」

伯母上は、本当に楽しそうな声で、驚くべき事実を語り始めた。

「近くに住むひよどりという女童めわらわのだけれど、物覚えが早くて、

これまで字も知らなかったのに、あつという間に覚えてしまつし、歌や物語を読み聞かせれば可愛らしい顔をして興味を示してくれて、

・・・もう、粗末な格好をさせておくのが申し訳なくありません、

このままここで預かつてしまおうかしらなんて思つておりますのよ。

「

・・・以前から酔狂な人だとは思つていた。だがさすがにこれほどとは思つてもいかなかった。

では、俺はその下賤めわらわの女童のために、高価な品を用意して、しかも自らわざわざ運んできたというのか？

瞬間的に腹の底が沸いて、何か一言でも文句を言つてやろうとした時、続いた言葉に怒りが消えた。

「ええ、それにね笛が見事なの。」

そして、息を呑んだ。

「・・・笛ですか？もしかして、10かそこらの女童めわらわで？」

思いもかけぬ期待に、胸が跳ねた。

もう会えないと思つていた。もしかして・・・俺は本当に今日は運

が良いのかもしれない。

「あら、どうして知ってるの？」

「伯母上、是非にも会わせて下さい！」

「どうしました？ 今は、朝霧あさぎりと一緒にいると思うのだけど・・・。

」

「伯母上、失礼します。」

「あ、あら、弘敦ひろあつ殿？」

伯母上の不思議そうな声を置いて、控えていた側の女房に頼み朝霧あさぎり・
・いや、ひよどりの所に案内を頼んだ。

肆・思いがけぬ期待（後書き）

（用語解説）

・女房

住み込みで働く女性。当然下働きの下女ではなく、貴族出の方々。需要がある一方で、働く女性を倦厭する考え方もあったらしいです。女が外で働き、多くの人に姿を見られるのは、はしたないといった感じだったようです。

・簀子すのこ

外に面した縁側というか、廊下みたいな場所です。平安扱った作品思い出して頂けるといいのですが、庭に面した廊下を歩いてたり、花を見ながら楽器を演奏してたりするのがここです。簀子とは元々は木材の形状をさすもので、それを使って張った床なのでそう呼んだそうです。

・ふわりと漂う香りの中で

アロマオイル焚いてる感じですね。そらたきものと言ったそうです。本当は香の名前も出したかったのですが、見たた資料に春の香が「紅梅」しかなかったので、パスしました。

・御簾みす

高貴な方々、また女性の姿をみだりに見せないために使われたすだれです。この隙間から着物を見せるのが風流だったりしたようです。

・小袿こき

女性の正装ではなく普段着を指します。袿きだと準正装になります。

・襲の色目かさね

この当時、衣を複数重ねて着ますが（今より生地が薄い）その際色の合わせ方。この時代、今異常にお洒落に力を入れてます。色にも名前がありますが、襲かさねにもそれぞれ名前があります。そして季節によってその色も違います。

・鬢削ぎびんそ

女の子の成人は装着が有名ですが、それはお金持ちの娘さんだけです。盛大に行われたようです。ではそうじゃない者はどうなのか？それが鬢削ぎびんそです。髪を大人仕様にカットするだけみたいです。元服や装着の成人の儀は、12〜16歳で行われる事が多かったようです。

年齢のついでに、それぞれの誕生日で年が増えるのではなく、正月に一斉に1つ年を取ります。

伍・執着ゆえに

「朝霧様、こちらにひよどりはおりますか？ あ、あの、弘敦様！
？」

案内してくれた女房をどけて、庇にずかずかと入り込むと、

「朝霧殿、そこにひよどりという女童はおりますか？」

そう自分で聞いた。

今は、ゆるりとした女のやり取りを待つのが我慢ならなかった。

「・・・は、はい、おりますが・・・。」

そうか細い声の返事を聞くと、

「そうですか、それでは失礼します。」

心にも無い言葉を言うだけ言って、乱暴に几帳をどけると双六をしていた女が一人と、女童が一人、そして案内してきた女房が悲鳴を上げた。

分かっている・・・非常識な行為である事は重々承知している。しかし、実際に目にしなければ、あの笛の女童がひよどりであるかの確認は出来ないだろう？

薄花桜の小袿を着た女は慌てて袖で顔を隠し・・・これは朝霧だな、いつのまにやら成人していたらしい。

そしてもう一人の女童は、賽を手にしたまま驚いた顔をこちらに向けた。

「お前がひよどりか？」

振分髪で、おそらく朝霧のお古であろう蘇芳の袂を着て、今は貴族の娘のような姿をしているが、この顔は間違いない。

無言でこくこくと首を縦に振り、驚きの顔は次第に恐怖の色に変化していった。

「笛もお前だな？ 雪柳の咲く社で笛を吹いていたのはお前なのだろう？」

ひよどりは顔を強張らせたまま再び首を縦に振り、肩から髪が流れ

た。

「ならば・・・笛を聞かせてくれないか？　またあの音を聞きたい。」

「何故俺はこんな女童めのわらわに懇願しているのか？　内側にいる自分が問う。」

しかし自身は、

「頼む。」

と口走り、頭を下げた。

「あ、あの・・・えと、あたしはそんな・・・。」

大いに困り、弱り果てた様子で、胸の前を動き回る手を捕らえようとした所で、邪魔が入った。

「何やら所縁ゆかりがおありのようですが、そこまでにして頂けますか？」

穏やかな物言いながらも、有無を言わせぬ何かを秘めた声の主は、

俺の伯母上の友であり、几帳きちょうの影に隠れようとしている朝霧あさぎりの叔母である白蓮びやくれんだ。

騒ぎを聞きつけ急いで参られたのだろう、庇ひさしの間を仕切る障子から薄鈍うすにびの衣きぬに袈裟きょうさを掛け、顔を扇で隠して現れた。

朝霧あさぎりはこの隙に几帳きちょうを飛び出し、白蓮びやくれんの後ろに隠れてしがみつく。

「大丈夫ですよ。今は無礼な行いをされましたが、悪い方ではありませんよ。ねえ、弘敦ひろあつ様？」

捕らえ損ねたひよどりをもう一度見た。白蓮びやくれんの声に救われたような顔をしつつも、俺に対して明らかかな警戒心を示している。

「・・・すまない。」

溜息を一つ吐いて、ひよどりに詫びた。

笛が聞きたかっただけで、こんなに怖がらせるつもりがあった訳ではない。

立ち上がってきちんと几帳きちょうを直し、少し退いた場所に床に座して、改めて詫びた。

「失礼致しました。捜し求めていた笛の主を見つけたと思い、心乱しました。」

「ひよどりですか？」

「はい。」

「確かに・・・この子の笛は見事ですものね。」

「はい、そう思いました。」

素直に答えると不意に空気が緩んだ。白蓮うまぐれんの静かな怒りと、その場にいる女達の息を飲むような緊張感とでぎしぎししていた空気が、白蓮びやくれんの漏らした笑うような声で一変した。

「ひよどりの笛は本物ですね、都の名士まで狂わせるのですから。・・・分かりました。皆が落ち着いてからまた改めて場を設けましょう。それでよろしいですね？」

無論、異論がある筈も無い。

「はい、ありがとうございます。」

「では後ほど。ひよどりもこちらへいらっしやい。」

「あ、はいっ。」

俺は頭を下げたまま、交わされる会話と、衣擦れの音が遠ざかるのを聞いた。

「ひよどりの笛はすごいわね、また後で聞かせてちょうだいね。」

「はい、白蓮様。」

その声が聞こえなくなり、しばらくして身を起こすと几帳きぢょうを眺めた。ひよどりのいた場所だ。

痩せぎすながらも黒い髪はつややかで、慌てた声は、まだ幼さが残るものの耳触りがよかった。外で見た時と着る物が変わっただけで、貴族の娘で通るほどの姿に見えた。

そして、息を吐いて目を閉じ、あの笛の音を思い起こした。

・・・おかしいな、まるで恋焦がれてでもいるかのように心が弾む。

しかしその物思いは、おずおずと声をかけてきた年増の女房によって乱された。

「あの一、木権様むくさがお呼びでございます。」
・・・もう一度、怒られねばならないらしい。

伍・執着ゆえに（後書き）

（用語解説）

・庇ひび

今のように軒下じゃなくて、れっきとした部屋。しかし、主人の部屋である中心部分をくると囲むような形にあります。そこを細かに仕切って部屋として住み込みの女房なんかが暮らしてたらしいです。

・几帳きちょう

カーテンみたいなものです。しかしこれはそう簡単に剥ぐってはいけない代物で、戸を開けて部屋の中に入るのは自由でも、几帳の先には入れません。それがルールだったのです。

・双六

今の双六は江戸時代からの物で、それ以前はバックギャモンのようなゲームで、賭博に利用して禁止令が出るほど流行したらしいです。

興味のある方は、調べてみて下さい。遊び方のルールを紹介しているサイトもありました。

・振分髪

男児・女兒のがしていた髪型です。肩くらいまでで切り揃え、ざっくりと真ん中分けで垂らします。

・裃あしめ

下着である単と、裃なんかの間に着る着物だそうです。小さい女の子の普段着もこれだったそうです。

・障子

この当時は今のような木枠の格子に紙を貼った物ではなく、襖ふすまの事です。

・薄鈍うすにび

鈍色は灰色で、薄なのでもっと薄いもの。忌み色とされ喪中とか、僧籍にある人が身に着ける色で、普通は着ません。

陸・花見の宴

「弘敦殿、あなたは何を考えているんですか？」

伯母上の前に座すと、いきなりそう切り出された。

白蓮びやくれんに引き続き御簾みすの向こうの伯母上からも小言を頂戴した。

自覚を持って非常識な事をしでかした訳であるから、反論の意思など無い。

小言・・・と言つには相当にきつい言われようだったが、神妙にそのお言葉を頂いた。

「生まれが卑しくとも、幼く歳が離れていても、ひよどりは私わたくしの大事な友人です。無体な真似はなさないで下さいまし。」

途中、伯母上はそう言った。

その言葉を聞いた俺は、目から鱗でも落ちたような衝撃を受けた。貴族の世界で生まれ、その中だけで生き、何不自由無い生活を当たり前だと思ってきたが、しかしこの世はそれだけではない。市井の者は多くいる。むしろ貴族の方が稀で特殊な存在だ。

だが、生まれが高貴で良い師がついたとしても、あれだけの笛が吹ける者はまずいない。しかし、ひよどりはそんな師も無く、心揺さぶる音を出す。

高貴を誇る者は出自を気にし、それだけで卑しく劣ると軽んずる。

しかし、生まれが卑しいからといって、何も出来ないと思つのは間違いであると、ひよどりが見事に証明してくれた。

「・・・もちろんです、私はここに来る途中聞こえた笛の音に魅せられ、茂みに分け入りその主を探し、ある女童めのおわらわの笛に魅入られました・・・類はその時のものです。無体な事などしたい訳ではありません。あの笛に生まれなど関係ありません、あれは天の与えた奇跡です。それを前に・・・いえ、ひよどりがその笛の女童めのおわらわと同じであ

るのか確認致したく、不覚にも取り乱しました。悪い事をしたと思
っております。」

そして更に、深く頭を下げた。

「それで、ひよどりで間違いありませんでしたか？」

「・・・はい。」

御簾の向こうから嘆息の声が聞こえた。

「・・・莫迦ですか？」

呆れた物言いに、俺は否定のしようが無い。

立場が逆なら俺も同じ事を思うだろう。

「怒る気が失せました。・・・あなたは笛の事しか頭に無いのですか？ 耳に届く噂とは、随分と違うじゃありませんか。あなたは絵物語の主人公のような、派手な生活を好んでいるものばかり思っておりましてのに・・・それとも、都の女は皆、笛の名士なのですか？」

まったく嫌味な人だ。笛を吹く女がいるはずが無いだろう。

とりかへばやの女君ですら、男の姿から女に戻る時、これが最後と覚悟して笛を吹き悲しんだのだ。

「そんな訳が・・・、いえ、派手な生活は好んでおりましたが、
「でしようね。」

刺すような見事な合いの手に、一瞬怯みそうになるが、ここで折れてはならない。

「・・・いやしかし、ひよどりを見て少し考えを改めました。」

「何をですか？」

女が笛を吹く事の何が悪い？ 見事な技の前に男も女も無い。貴賤の差も無い。

そうであると思ひ込む事の方が悪だ。

「慣習の思ひ込みの愚かさです。」

一瞬の沈黙を経て、懸命な思ひは一笑に伏された。

「まあまあ、悟ったかのような事をおっしゃるのですね・・・まあ良いでしょう。ではあなたの莫迦さ加減に免じて、白蓮殿びやくれんの言われ

るように、笛を聞かせてさしあげますよ。」

「ありがとうございます。」

俺はただただ頭を下げた。

呆れられた度合いの方が多そうだが、その声には慈愛が込められているような気がする。とりあえずは許しを得る事が出来たらしい。

そして、きちんとした席まで設けてひよどりの笛が聞ける。これは嬉しい事だ。

「・・・そうですね、せつかくですから花見と洒落込むのも良いですね。弘敦殿、今宵のあなたは楽士です。存分に皆を楽しませて下さいませね。」

・・・おかしな事になったな。だが、当然俺には拒否権など無い。内心にある不満を押し隠し、承諾の意を示して再び頭を下げた。

「あー、それと・・・また絹を届けて下さいませね。もちろん今度は皆にですよ?」

なるほど、それは迷惑料つてやつだな。

宵闇の庭にいくつもの篝火が灯され、八重の桜を白く白く際立たせる。

階の先に舞台を設けて、その端にもそれぞれ篝火が焚かれた。

急の思いつきのくせに、まったく大した準備である。

火に炙られてはせる松の音を遠くに聴きながら、燈籠の吊られた簀子で、俺は慣れぬ誰かの琵琶を掻き鳴らした。

御簾の向こうの廂の間には伯母上達が並び、各々花を愛でている。

空を見やれば、東に上弦の月が浮かんでいた。

闇が増すほどに冷えていく風に当てられて、冷える体を酒で温めながらひたすら楽士として奉仕した。

だが、伯母上達の側に行き、あの厳しい言葉の続きを聞かされるより、気ままに奏でているの方が気は楽だった。

時に求めに応じて曲を奏で、また時に唄った。誰ぞ舞う者もいた。昔の姫君が箏の琴を奏で、和歌を競う者もいた。

酒も十分回り、場が和みに和んだ頃、ようやく待ち侘びた時が来た。伯母上が一同を制して、ひよどりを呼んだ。

「ひよどり、あなたの笛を聴かせて？」

はいと可愛らしい声が出た後、薄い紅の裃に白い汗衫の正装を身に着けた一人の女童が、緊張した面持ちで庭に据えられた舞台上に上がった。

白々とした光を放つ月は、東から幾分高い位置に移動している。

ひよどりは先ず、ぎこちなく頭を下げて、顔を上げると深呼吸をして目を閉じた。

そしてゆっくりと篠笛を口に当てると、次の瞬間全身に鳥肌が立った。

笛から流れ出る高く澄んだ音は、酒を帯びて緩んだ空気を一変させて行く。

皆がその音に耳を傾けて口を閉じ、雑音とも思われる談笑の声は次第に止んだ。

ようやく待ち望んだ音を耳にして、俺はその慣れぬ旋律を身に刻みでもするかのように全身で受け止めた。やはりひよどりの笛には何かがある。

これほどまでに心を震わすのは何故か？ これほどまでに惹かれるのは何故か？

・・・俺は我知らず涙で頬を濡らし、天賦の才に心酔した。

陸・花見の宴（後書き）

（用語解説）

・とりかへばやの女君

「とりかへばやものがたり」の主人公です。男勝りの姫が男として生き、女々しい若君が女として生きるお話です。そうだったのは天狗の仕業らしいのですが・・・途中で、男女が戻ります。好きなんですよ、この物語。男女入れ替わりも面白いんですが、オイオイ！って展開がいつぱいあって。

で、笛は男の楽器なので、女の姿に戻るともう吹けなくなります。それを覚悟して、もう吹く事も無いんだなあと、悲しんだ件くだりがあります。

・階きわはじ

要は階段です。寝殿の南面中央に位置する五段の階段。

・箏そうの琴

日本の琴の事。琴は中国から渡来したままの物・・・って感じで良さそうです。

・汗衫かざみ

元は下着だったようですが、女の子の正装を指します。裯おしろいの上から羽織ります。

漆・梅雨空

「何かする事は無いんですか？」

五月も半ば過ぎ。

たまに降るものならば心地良く聞こえる雨音も、こつ幾日も続かると気が滅入って仕方が無い。

蒸し暑さに参り、着崩してだらしなく脇息にもたれ酒をちびちびと舐めるように飲み、回想に心を馳せていた。

静かに目を閉じて、篝火に照らされたひよどりを想う。

心地良く心を震わす音色を思い返し、幾度とも知れぬ溜息を吐いた。笛に合わせて、即興で琵琶を合わせたあの心地良さ。

こちらに帰る事を億劫に思うようになるとは、行きにはとても想像していなかった。

・・・別にやる事が無い訳ではない。

俺は俺で物足りない物を埋めるため、少しばかり以前の記憶に逃げているだけだ。

「もう、^{かひ}懲が生えますよ？　こんな調子でお勤めは大丈夫なんですか？」

「今は物忌み中だ。」

「存じておりますとも。」

乳兄弟の達実の姉である山百合は、団扇で俺を扇ぎつつ、ひたすらに思考邪魔をする。

身の回りの世話をしてくれる存在ではあるが、お節介は勘弁願いたい。

「昼間から暗い様子で酒ばかり召されて、はつきりいって目障りです。」

ひどい言われようだな。

「他に何かなされる事は無いんですか？ あ、ほら、馬にでも乗ってこられたら気が晴れるやもしれませんよ？」

「この雨の中か？」

それは案に目の前から居なくなれ・・・と、いう事だろうか？

「・・・あー、そうですね。じゃあせめて明るい顔をなさって下さい。」

「物忌中にやたら明るいのも妙だろう？」

面倒なので理屈で返す。

陰陽師が言うには、昨日からの五日間、何かの神様がうちの屋敷の前を、お通りになるらしい。よって、その間は邪魔をせぬよう引き籠ってやり過ごしている。

物忌みには通常、身を清浄にして謹慎をするものだ。

「人それぞれでございますよ。真面目に謹慎なさる方もいれば、有意義に過ごされる方、口実に使われる方だっておりますもの・・・以前は弘敦様もそうだったと山百合は記憶しておりますが？」

確かにそうだが、別に責められる事ではない。そんな者は沢山いる。「・・・なら、琵琶でも持つて来い。何かしてればいいんだらう？」根負けだ。こつこつ時の山百合は引かない。

今はそれに付き合って、延々とやり合う気力は無い。

「はいはい、すぐにお持ち致します。」

山百合はあっさりと団扇を下ろすと、嬉々として塗込に向かった。

使い慣れた琵琶を軽く調弦して、音を鳴らした。

湿気に満ちた雨の日に響く音は僅かに鈍い。しかし側の山百合は気に入った様子も無く、機嫌の良い顔を見せている。

気乗りのしないまま適当に弦を撥で弾き、何を弾いたものか頭を廻らすが、そんな頭で考えた所で、琵琶を置いてしまふ事くらいしか思い付きなどしなかった。

「何か聴きたいものはあるか？」

「いえ、山百合は何でもいいです。」

・・・それは一番困る答えだ。

わくわくした子供のような顔をして待っている山百合やまゆじに嘆息して、再び意味の無い音を鳴らした。

山百合やまゆじは昔から俺の琵琶が好きだと言い、自分は琴も碌に弾けもせぬのによたらと琵琶には詳しくなった。無論、聴く側としてだが。

一緒に育つたため、いつもこつして側で聴いていた。おそらく一番古く、そして熱心な信望者だろう。

さて、何を弾いたものか・・・

耳に残る音を鳴らしてみた。

本来ならば笛の音なのだが、それを琵琶で鳴らした。

俺の心を捉えて離さない、あのひよどりの奏でた音だ。

俺の知る世界では耳にした事の無い、おそらく市井の者の曲なのだろう。

篝火の光を浴びて浮かび上がる白い桜を背にし、自らも揺らぐ炎に照らされて白い汗衫かきみに影が躍る。

幽玄の世界の中に響き渡る清廉な笛の音。

その景色を思い返し、その音を蘇らせたかった。

俺にもその音を鳴らす才があるか？ 神に祝福されるだけの何かがあるか？

涙を流すほど、打ち震える音は俺にも出せるのか？

・・・それは、天に居られる何者かへの挑戦だったのかもしれない。心を捉えて放さぬ心酔の思いは嫉妬にも似て・・・素直に羨望するには、自分は楽の道に踏み込み過ぎている。

「これほどの琵琶は初めてです。旋律も耳慣れぬものですが・・・胸が締め付けられるようでした。胸が早鐘のように打ち・・・少し怖いような気が致しました。」

・・・それが答えなのかもしれない。

山百合は視線が定まらぬまま、言葉を選んで口を開いた。

焦燥は怒気を孕み、聴く者を不安にさせた。

心穏やかにして、まず自らが楽しまずして、どうして人を感涙せしめられようか？

楽士としてのありように、根幹から揺らぐ今の心の内を疎み、琵琶を手放した。

「やはり今は気分が乗らぬ、仕舞っておいてくれ。」

そう言い置いて立ち上がり、巻き上げられた簾を避けて庇から簀子に出た。

「どちらに？」

「その辺りに。雨でも見ながら気分転換かな。」

人の居ない簀子に座して高欄にもたれ、延々と天から垂れ続ける雨粒をぼんやりと見上げた。

空にある雲は鈍色で、流れて位置が変われども、相変わらず同じ色を止めようとはしない。

敷石に弾ける粒が、それぞれ雑多に音を立て、交じり合って眠気を誘う音を成す。酒を帯びた頭には子守唄にも等しい。

しかし、心には言い表せぬ感情が渦巻き、それが眠気を遠ざけていた。

不意ににやあと声がして、脇を見ればもみじが足に擦り寄ってきた。我が物顔で人の足に上がるので、背にある黒い紅葉の模様を撫でてやると、再びにやあと細く啼く。

猫にも思い煩う事はあるのだろうか？

膝の上の気ままな姿に、それは無さそうだなと一人ほくそ笑んで、今度は白く柔らかい喉を撫でた。

ごろごろと鳴る音を聞きながら、心はまたひよどりに向く。

これほど嫉妬に狂うとは思ひもしなかった。

琵琶だけでなく、笛も得意なつもりでいた。

しかしそれはとんだ思い上がりであったと、真の才能を前に恥じ入りたい心地になった。

曇天を眺め、いずれは空が晴れるように、心の内にも光が射すだろうか？

そう感傷的な事を考えていると、もみじは身じろいで膝から下りた。そしてそのまま長い尾を揺らし、振り返りもせず優雅に歩いて何処かへ向かう。

・・・猫にまで見捨てられたか？

その後姿を見送りながら、自嘲的に自分を笑った。

漆・梅雨空（後書き）

（用語解説）

・物忌み

作中のみみたいな事もありますが、夢見が悪かったとか、今日は気分が優れないとか、物忌みと言っておけば、堂々と休める素晴らしい言葉。でもその間は、届けられた文も受け取れません。ちなみに天皇の場合は「御物忌み」宮中に居合わせた人々も帰れなくなります。

・塗込ぬりこめ

風通しの良すぎる寢殿造りの、唯一しっかりした壁のある場所。物置とか寝所として利用されます。

・高欄こうらん

すのこ 簀子についた柵です。

・猫

中国から輸入した高価なペットであります。とてもとても大事にされました。猫をいじめた犬は酷い目に遭わされます。背が黒で腹が白いのが一番人気だったそうです。

捌・無垢

「さすが見事な琵琶だ。褒美を取らせよう。」
宮中で催された宴で、帝に召されて琵琶を鳴らした。

お褒めの言葉を頂き、お召しの絹まで下賜かしされて、とても栄誉な事だ。

父上もたいそうお喜びになり、少々面映い心地がする。

これもひよどりのおかげに他ならない。

先日、伯母上の所に参じて来なければ、再びこんなに清々しい気分で琵琶に触れる事は出来なかつただろう。

いつものように達実たつみ一人を共に連れ、それぞれに仕立てた衣きぬと、未だ手付かずの絹と、ひよどりのために龍笛を持ち、自分の琵琶と龍笛も忍ばせて、馬に揺られて伯母上の庵を目指した。

この度は茂みに分け入る事も無く、強い日差しに何度か馬を休ませたが、他に道草はしていない。

以前のように嫌々ではなく、蝉せみの煩く啼く道程を、楽しみと恐れの混じった心持で歩んだ。

庵に着き持参の品々を預け、伯母上への挨拶もそこそこにひよどりを探して会ってみれば、胸を焦がす嫉妬いずかたは何方かへ去り失せて、楽しい思いだけが心を占めた。

久しぶりに見たひよどりは、少しばかり細いものの、どこからどう見ても貴族の姫君にしか見えなかった。

新しげな杜若かきつばたの裯あこめを着て、俺に向かつて簀子すのこを駆けて来た。

・・・姫君にしては少々元気が良すぎる。が、咎める気は無かった。

「また一緒に演奏してくれますか？」

息も切らさず狩衣かりぎぬの前にしがみ付き、嬉しそくにそう問われ、こちらの方が恥ずかしくなった。

この辺りも深窓の姫君とは程遠い。

「も、もちろん。この度はそのつもりで、琵琶や笛を持参しました。」

後ろに従う荷物持ちの達実たつみを振り返り示すと、達実たつみは口を開いて啞然とし、ひよどりもそれを見て恥じ入ったように離れた。

「ご、ごめんなさい。またあの琵琶が聴けるかと思うと・・・嬉しくて。」

頬を染めた姿は幼く、あどけなく、感情の起伏が大きくて、微笑ましい。

「それでは白蓮殿びやくれんに挨拶をして、それから一緒に演奏しましょう。案内をお願い頂きますか？」

ひよどりが駆けて来た方向を蝙蝠扇かわほしで指して促すと、

「はい。」

と、元気な返事をした。

・・・ひよどりを見てると、どうにも自然と表情が緩む。

「まあまあ、・・・はしたないですよ。しかし、随分と懐かれたものですね、弘敦様ひろあつ。如何なる手妻まてに使われたのでしょうか？」

「心外な事を・・・何もしておりませんよ。・・・実は俺も驚きました。まさか駆けてくるとは思いも致しませんでした。」

こちらの主である白蓮びやくれんに挨拶すると、まずひよどりはそのお転婆を咎められた。

「弘敦様ひろあつが来ると聞くとすぐに駆け出してしまい、正直肝を冷やしました。まだまだ以前の暮らしが抜けませんね。もつと躡をつるさく言わないといけなにかしら？」

「そんな、白蓮様びやくれん・・・。」

ひよどりが御簾みすの向こうで情けない声を上げた。

「・・・以前の暮らしという事は、引き取られたのですか？」

確か以前伯母上が、引き取りたいと言っていたが、

「ええ、木槿殿むくげが引き取られましたか・・・聞いておられませんの？」

聞いていない。正しくは、簡単な挨拶をしただけで、その場を逃げてきたというのが正しい。

「はい、聞いておりません。・・・そうですか、引き取られたのですか。」

お転婆なひよどりは、形の上では本当に貴族の姫になったらしい。

「ええ、親はこちらで下働きに雇ってありますので、呼んで話をし、正式に木槿殿むくげが預かる事に致しました。会おうと思えばいつでも会えるので、ひよどりも二つ返事でこの申し出を受けてくれました。」
白蓮びやくれんの和やかな声を受けてか、何やら姫二人の笑いあう声があった。

「このように朝霧あさぎりも喜んでおりますし、可愛らしい住人が増えて私も喜んでおりますのよ。」

そして再び可愛らしい声が響いた。

「今日はひよどりにお土産を持って参りました。」

几帳きちょうを脇に除けて正面に座るひよどりに、漆の塗られた箱を開けてうやうやしげに絹を巻かれた籐巻とうまききの龍笛りゅうふえを取り出して渡すと、目をぱちくりさせながらおずおずと受け取り聞き返してきた。

「あの、これは・・・？」

その様は新鮮で、思わず頬が緩む。

文に何も無いだとか、土産が無いだとかで怒る女は多くいるが・・・

「龍笛です。籐笛より少し重く低い音を奏でますが、私はこれを嗜みます。」

「・・・はあ、これを私にですか？」

「はい。籐笛とそう変わりは致しませんよ。一緒に吹きませんか？
そう言つと途端に面が煌く。」

これ程までに喜ばれると、作らせた甲斐があるというものだ。

「まだ慣れませんが、楽しいです。木槿様むくげが仰られていましたが、本当に笛もお上手なんですね。」

ひよどりは、上がる息に弾む胸を押さえきれない様子で、頬を染めて言葉を紡いだ。

「いえいえ、ひよどりには負けたと思いましたよ。」

事実、一時は激しく嫉妬に駆られた。

今こんなに楽しく、清々しいのが不思議なほどに、苛烈な思いに苛まれた。

さすがに今は、慣れぬ道具に探りながらではあったが、おそらくすぐに慣れるだろう。

まったく大した才能だ。

「そんな、私は・・・私はあの夜、桜を愛でた夜の弘敦ひろあつ様の琵琶に感動致しました。一緒に演奏したのもとても楽しくて・・・あの、琵琶も弾いて下さいますか？」

龍笛を握る手を膝の上にきちんと置いて、可愛らしくもじもじと見上げてお願いされれば、断る理由は無い。

「ええ、もちろん喜んで。」

ぱっと、花のようにほころぶ顔に、思わずつられて目元が緩む。

こつも一々素直に喜んでもらえる、嬉しくて仕方が無い。

笛を脇に置いて琵琶を取り、軽く鳴らして音を確かめた。

「何か曲の希望はありますか？」

「いえ、まだきちんと曲を学んでおりませんので・・・何でもいいです。」

・・・ひよどりまで一番困る答えを返してくれるか。

苦笑して目を閉じ、弦を鳴らしながら頭を悩ませた。

さて、何を弾いたものか・・・。

「では、夏の曲をやりましょうか？」

講義のつもりでまず解説をして、知る意欲に溢れた顔に満足し、琵琶の弦をかき鳴らした。

捌・無垢（後書き）

（用語解説）

・お召しの絹まで下賜かしされて
当時の褒美は絹です。素晴らしい演奏をした者に、身分の高い者がその場で着ている着物を脱いで、授けるのは名誉な事だったらしいです。逆に言えば、身分の高い者は着物を脱いで渡すのが当たり前だったらしいです。たくさん着てないと出来ませんよね。

・杜若

花ではなく、花をイメージした色です。どんな色かは検索してみてください。

・狩衣

元は狩や外に出てアクティブに動く時の服装ですが、男性貴族の普段着というのが正しいです。

・蝙蝠扇かわほり

扇子の事です。扇は尺から変化したもので、檜で出来た扇を指します。しかしそれでは重く風も起こらないので、今と同じく竹の骨に紙を貼った物を、その形から蝙蝠かわほりと呼んだそうです。

・手妻てしつま

手品、奇術の事。魔法という言葉の変わりに使いました。この時代にそんな言葉があったのか知りません（オイ）江戸時代にはあったようですが。

・籐巻きの龍笛とうまきりゅうてい

外側に籐が巻いてあるのは飾りです。樺も巻くそうです。

・文に何も無いだとか、土産が無いだとかで怒る女は多くいるが・
・枕草子から引用致しました。清少納言はそついう事で怒っております。

玖・月光

ひよどりと出会って、そろそろ二年が過ぎようとしていた。

その間に従四位下の左の近衛中将この近衛中将から、従四位上に昇進しに任じられ、藏人頭くわんじんづつも兼任となり、頭中将かみじゆうじゆうと呼ばれる身となった。

そして、以前にも増して帝に召され、楽や和歌の供をする機会が増えた。

以前、御前で琵琶を奏してから、何となくそんな気はしていた。

宴や楽の遊びの度に召され、名誉な事ではあるのだが・・・今上いまがみは歳若く、俺とあまり歳が違わなためか、遊び相手に丁度良かったのではないかと感じている。

それでも相変わらず暇を見つけては、伯母上・・・いや、ひよどりに会うために、伯母上の庵に通う事を続けていた。

「先日ひよどりの鬢びんそ削ぎを致しました。もうあの子も既に成人です・・・以前のような振る舞いなど・・・なされませんように。」

伯母上がそう言ったのは、日中はまだ暑さの残る、葉月の十五夜を三日過ぎた日の事だった。

几帳きちやうの向こうのひよどりとときこちなく言葉を交わし、いつものように楽を共に奏でても、お互いに居心地の悪さを覚え、良い音は鳴らなかつた。

「やはり不思議な気が致します。大人なのだから・・・と木槿むくげ様は仰るのですが、何となく不自由です。」

苦笑しながら琵琶を置くと、几帳きちやうの向こうから拗ねたような声がした。

「そつかもしれませんね。でも世の姫君は皆こうして几帳きちやうや御簾みすの陰で、扇で顔まで隠して声もお聞かせ頂けませんよ。」

「そうかもしれませんが私は・・・もともとそういう者ではありませんが、頭では解っていても、どうにも慣れません。木槿むくげ様に聞かれると叱られるますので、あまり言えませんが・・・。」
そう、儂おろげに笑う。

「俺も慣れずに思う音が出せませんでしたか・・・ここにきて早々に伯母上に釘を刺されましたので、何も言わない事にしておきます。」

「そんな、弘敦ひろあつ様だけずるいです。私は本音を申しましたのに。」

「それが大人というものですよ。」

そう余裕があるように笑って見せたが、内心ではひよどりと同じく、この当たり前の几帳きちようが邪魔で邪魔で仕方が無かった。

夜半に忍んで入り込んできた珍客の、秋の虫の側で鳴く音に驚いて目を覚ました。

・・・こういうものは、遠くで鳴くのを聞くのが良い。

妻戸つまどを開けて外に逃がし、差し込む月の光に誘われた。

そろりと音を立てぬように用心して外に出て、光を辿って見上げてみれば中天に居待月いままちつきが煌々と輝いていた。

望月には敵わぬものの、月はただそれだけで美しい。

もっとよく見える場所をと求めて簀子すのこを歩き、この辺りかと足を止めると、ある歌を口ずさんだ。

「秋の夜の 月の光はきよけれど 人の心の隈は照らさず・・・か。」

後撰和歌集にあるものだ。どんなにこの月が明るくてもあの人の心の奥までは照らさない。想う人の心の機微は、几帳きちように隠れて思うようには量れない。

そんな思いを重ねて詠んだ。

それほどまでにひよどりの姿を見れないのが、堪えていた事に驚き溜息が漏れる。

幼い姿から、会う度に美しくなる様に、惹かれてゆくを感じていた。

いや、すでに姿を見る以前から、その笛の虜だった。

物思いに沈みかけた時、不意にその歌に返しがあつた。

「月にさえ 秘めし内まで照らさなば 人の思いの陰ぞ無しや？」

月の光に心の中まで照らされたら、隠し事など出来無いでしょう？

とは見事な返した。この月を見ているのは自分一人だと思つていたのに、思いもかけず求めていた声を聞き、俺は迷いも無く歩を進めた。

「その声はひよどりですね？」

「そう言う声は、弘敦様でしょう？」

機知に富んだ返事があり、くすりと笑う気配を求めて角を曲がるとひよどりが単に緋袴だけのあられもない姿で簀子に座つていた。しかも、行儀悪く高欄にもたれて、その隙間から足を出し、ぶらぶらとさせていた。

おまけにその足は袴をたくしあげ、白い素足が月の光に晒されている。

「・・・それは、行儀が悪いでは済まない姿ですね。」
後ろに長く垂れた髪は無造作に広がり、光を返して悩ましげに艶めく。

「夜はよく、こうやって月を見ます。」

どこかで鳴く鈴虫や松虫の声が辺りに響き、天の月と相まって風情ある情景を成している中、心の臓は無粋にも不自然に早く打ち鳴らされた。

「しかし、その格好は無いでしょう？」

「今宵は弘敦様がいらっしゃいましたが、普段は誰も居ませんもの。」

月の光が当たり、さらに白さを際立たせた面は、事も無げにそう吐いた。

「以前にも夜中に目が覚めると、戸の隙間から月を見ていました。」

こうしているとあの頃に返ったような心地が致します。無論、こんなに立派なお屋敷などではなく、粗末なあばら家ですけれど・・・そういえば、以前読ませて頂いた草子に似合わないと書かれておりましたが、月の光は何処へでも射しますのに。」

懐かしむような口ぶりから、不意に少し不満気な顔をして乱暴に足を振り上げると、白い足がさらに覗き目のやり場に困る。

「・・・雪も何処へでも降りますからね。あの女史は忌憚きたん無い方の方です、自分の意見を人がどう思おうが、おそらく気にしてはおりませんよ。」

「私は苦手です。・・・雅の方々は皆そうなのでしようね。ここの人達は皆優しく、でも・・・世では私のような者は取るにも足らぬのでしよう。」

「そんな事は無い！ ひよどりの笛は誰にも劣らぬ・・・神から下されたかのようなその才に、生まれなど問題ではない。」

力無く洩れ出したひよどりの内からの声に、俺は心乱れる思いがしてその言葉を必死に否定した。

こんなにも才に溢れた人が、自らを卑下する姿は辛く哀しい。

「弘敦様？」

「・・・俺がこんなにも心惹かれているのを、存じてはおられぬのでしょうか？」

ひよどりの側に方膝をつき、肩にかかる髪を一房取って滑らせると、さらさらと流れて白い単ひつえに広がる。

「あれほど幼かったのに、いつの間にもやたら美しくなり・・・なのに、ひよどりは無防備過ぎます。せつかく自制しておりましたのに、籬たがが外れてしまいます・・・」

肩からそのまま単ひつえの絹の上を撫で、高欄こうらんに置かれた柔らかい手に添わせ、上から握った。

「あの・・・弘敦様・・・」

座したまま見上げてくるひよどりを掻き抱いて口を塞ぐと、焚き染められた侍従しじゆうの、仄かな香りに更に胸が騒ぐ。

そして戸惑つひよどりをそのまま攪かきまい、月の目より逃にれて庇ひたの間に
入りて、募る思いを遂げた。

玖・月光（後書き）

（用語解説）

・従四位下 このえちゅうじょう 左の近衛中将
従四位上、くわんにん 蔵人頭
頭中将 とうちゅうじょう

えーと、難しい所。階位と役。はつきり言って分かりません。近衛は宮中の警備員で、その中将。トップは大将なのでその下になります。

蔵人は天皇のお世話をする係り。そのトップが蔵人頭。

そして近衛中将と、蔵人頭を兼任する人が頭中将と呼ばれます。

物語にはよく出てくるので、そのまま使わせて頂きました。貴族のお坊ちゃまの出世コースです。

参考にした本を書かれた橋本治さんも、この辺投げ出されてたので気が楽になりました。貴族は結局、政なんか何もしてないから、階位を上げて出世してその位に合った役を付ける。そして私服を肥やして、遊びに耽る。と、そんな結論に達されてまして、なるほどなーそれなら納得したと、安心しました。

・妻戸

ドアです。

・居待月 こまひしづ

18日目の満月からやや欠けた月。

立って待つには長すぎるので「座って月の出を待つ月」って意味らしいです。

・単ひとへに緋袴ひばこだけ

姿としては巫女さんの格好です。しかし袴はもつと長く足は一切見せません。ちなみにこれは下着姿です。

・髪

かなり髪にこだわって書いてると思われたかもしれませんが、髪はセクシャルな場所なのです。この時代少しイスラム的です、女性性は人目に触れないようにとか・・・いや、性に対する倫理観は全く違うな。

・鈴虫や松虫

今とは名前が逆なのだそうです。

・以前読ませて頂いた草子

これも枕草子。下衆の家に月の光が差し込むのは、もったいないのだそうです。下衆の家に雪が降ってきれいなのも似合わないそうです。あー貴族社会なんだなって実感する部分です。

・あの女史

もちろん清少納言です。

・侍従じこの、仄ひそかな香り

薫香の1つ。秋の香りだそうです、私もどんな香りなのか知りたいです。

拾・強行

「何を言い出すのですか、ひよどりを都に連れて行くなど許しませんよ？」

「いえ連れて行きます。向こうできちんと樂を教え、所作や字も習わせます。ひよどりの才を思えば、このような場所に、いつまでも留めておくのはもったいない事とお思いになられませんか？」

「ひよどりの事を思えばこそです。ここで静かに暮らす方が、この子のためになると思っております。自由に笛が吹けるのもここでこそだと思えますよ？ 都で奇異の目に晒されて、不幸になる事は目に見えております。」

「そんな事はありません。俺がさせません！」

数日留まった後、そろそろ都に戻らねばならないが、その前にやる事がある。

・・・と、その際にひよどりも一緒に都に連れて行き、そのまま俺が預かりたいと伯母上に願い出たのだが、予想以上の猛反対に遭っている。

こちらも引かずに御簾の向こうと声を荒げ合っていたが、しばらくの間が開いて、溜息の洩れる声が耳に届いた。

「・・・弘敦殿、皆が皆、あなたのように思う訳ではありません。」

例えあなたが守ると言っても、人の口に戸は立てられません。その声は巡り巡って、いずれひよどりに届き、哀しみ辛い思いをするのはあの子です。」

「しかし・・・、」

「しかし何もありません。女の後ろ盾では心許無くとも、ここにいればまだ自由でいられます。ここでは笛を吹いても何も言う者はありません。しかし都につれて行けばどうですか？ 出自を詮索す

る者もいるでしょう。心安い者も無く、一人寂しい思いをする事になるのですよ？・・・解りますか？辛い思いをするのはひよどり、あなたではありません。それとも宮仕えを投げ出して、四六時中あなたがついているとでも言い出すのですか？」

返す言葉は無い。
そうしたいと言える若さはあるが、それと同じく貪欲な出世への意欲も拭い去れず。はつきりとした返事を返せなかった。

「若いうちはせいぜい頑張つて出世なさい。その方があなたのためです。今上（きんじょう）さんの覚えがめでたいのでしょうか？・・・ひよどりに会いたければここにおいでなさい。私もあなたたちの合奏を楽しみにしているのですよ。これからも私を楽しませて下さい。弘敦殿（ひろあつ）、
・・・ひよどりを私から奪わないで下さい。」

激しい言い合いの最後は、穏やかにきつぱりと断られた。

・・・しかし、これで諦める事は出来ない。

思いを遂げ、逢瀬を重ね、ますますひよどりから離れる事が出来なくなつた。

しかし、いつまでもここに留まっているわけにはいかない。

友のように親しくして下さる帝の許を、無下に去るのも心苦しい。

伯母上の言われるように、今出世するのは確かに自分のためだろう。

けれど・・・。

心にあるのは、愛らしいひよどりの声、機知に富んだ話しぶり、黒い髪、白い肌、芳しい香に混じる恥らう姿。朝まだきの物憂げな姿も愛らしく、後に交わす文も素晴らしい。

そして・・・何度耳にしても、飽きる事無く心を惹きつけて已（や）まない
笛の音。

思いもかけずに手に入れてしまった幸運を、俺は手放す事が出来なくなつた。

「いいんですか？ 絶対木槿様は激怒なさいますよ？」

「いい。」

二十四夜の月の、細く心許無い光の下で、こそこそと馬を引き出した。

来た時と同様に達実を伴い、そして衣を引き被つたひよどりを鞍の前に乗せ、ひっそりと静まり返る伯母の庵を後にする。

ただ秋の虫の音が響く中、この世に住まう者は自分達だけではないのかと錯覚するほどの寂しげな道を、二頭の馬で駆け出した。

拾・強行（後書き）

（用語解説）

・女の後ろ盾

いくら実際には女のほうが強くても、社会的立場はやはり低いのです。

・今上さん

今の天皇という意味です。

・後に交わす文

もちろん後朝の歌です。えーと・・・どう説明しようかな？

男女が睦まじい夜を過ごした後に、男から歌を届け、それに女が返歌を返します。

この歌の出来が悪かったり、寄越すタイミングが悪いと、嫌われたりします。

文だけでなく、それを花の枝に結んだりすると、高感度がアップします。

と、これで一章は終わりです。

世界観、文化、日常の暮らし、色々調べたつもりですが、

それでも分からない事だらけなので、最後はイメージで書きました

（笑）

この先も、私の試練がいつぱいです（汗）

次章は「ひよどり」彼女の心の機微に焦点を当てますので、時間軸的には、一章より前から始まります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8563s/>

白花の笛

2011年6月25日13時40分発行